# 最前線（1957）

MEN IN WAR

**メディア** 映画
**ジャンル** 戦争　ドラマ
**製作国**　アメリカ
**色彩**　B&W
**時間**　100分
**初公開日** 1957/05/25
**公開情報** セレクト＝松竹

**【解説】**

Ｖ・Ｖ・プラーグの“Day Without End”をＰ・ヨーダンが脚色、極めて厭戦的なムードに塗りこめられた、朝鮮戦争を扱った映画としてはまずベストの作品。アメリカ人にとってベトナムに遡る正体不明の戦いは、ここに贅肉を削ぎ落とした西部劇的構図を持った痛ましいが見事な活劇となって、精いっぱいの存在意義を主張している。

物語は最初からドン底の状態で始まる。疲れ切った兵士たちの表情。周囲を敵に囲まれて古参の無線兵の呼びかけに本部は一向に応じない。病気の若い兵（Ｖ・モロー）に無理をさせ、ベンスン中尉（Ｒ・ライアン）率いる隊は目指す高地に急いで向かうことにする。幸い、他部隊から逃走してきた軍曹モンタナ（Ａ・レイ）の駆るジープを徴用、武器の運搬にも支障はない。彼が連れている大佐は砲撃で頭をやられ口もきけない。が、彼を息子と呼んだ大佐の面倒をモンタナは律儀に見ていた。彼らはこの隊の知らぬ“地獄”を既に体験したのだ。ベンスンがまだ覚えきらないうちにメモに書いた部下の名が次々に消されていく。ヘルメットに花を飾る優しい黒人兵がまず犠牲に。そして、中尉が使う無線が狙われ、敵の精鋭ぶりが知れる。生け捕って情報を聞き出そうにも軍帽の中に小形銃を隠し持つ連中だ。その辺を実戦経験豊かなモンタナはよく把握しているからこそ非情だった。砲撃をくぐり抜け、地雷原を爪先立って歩き、彼らは高地手前にたどり着く。ニセのＧＩに化けた敵をとっさに撃ったモンタナには彼が敵だという確信はなかった。その本能的衝動を恐れる中尉は、神はお前を勝たせるのか、と罵る（敵兵のヘルメットの内側には家族の写真があった）。しかし、結局、このアリ地獄から抜け出せたのは、中尉とモンタナ、そして臆病者の古参兵だけだった。一人、また一人銃弾に手榴弾に倒れていく……。マン監督のロケ演出の感覚の鋭さは一連のウェスタンでもおなじみだが、本作でそのピークを極めたと言っていい。

**【クレジット】**

| | | |
|---|---|---|
| **監督** | アンソニー・マン | Anthony Mann |
| **製作** | シドニー・バックマン | Sidney Buchman |
| **原作** | ヴァン・ヴァン・プラーグ | Van Van Praag |
| **脚本** | フィリップ・ヨーダン | Philip Yordan |
| **撮影** | アーネスト・ホーラー | Ernest Haller |
| **音楽** | エルマー・バーンスタイン | Elmer Bernstein |
| **出演** | ロバート・ライアン | huranku/bu-nn |
| | アルド・レイ | Aldo Ray |
| | ロバート・キース | Robert Keith |
| | ヴィク・モロー | Vic Morrow |
| | ジェームズ・エドワーズ | James Edwards |

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。　Copyright (C) 2026 Stingray. All Rights Reserved.